とある科学の一組男女～インターフェア～

ゆーたん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある科学の一組男女～インターフェア～

【Ｎコード】
Ｎ３５５５Ｍ

【作者名】
ゆーたん

【あらすじ】
学園都市――
総人口２３０万人。その内実に８割が学生が締める街。超能力が科学的に証明されていた世界。
幻想御手事件後、補修を受けに来た佐天涙子は、同じく補修を受けに来た御田頼崇と出会う。なんだかんだ街ですれ違う二人は、いつの間にか意気投合しよく遊ぶようになる。能力を語る二人はついに能力を発現させる。それは無能力者だった二人にとって、念願だった能力を手に入れた二人。やがて二人はお互いの能力の弱点に気づ

く。それは落胆ではなく、さらなる可能性を秘めていた……。

二人で一つの……（前書き）

短編にしようかと思ったのですが、それではまだいろいろ謎が残ったままだなと思ったのですけど書いて見ました。
思いつきで書いて見たのですが、みなさんの反応がよければ連載しようかなと思います。

二人で一つの……

学園都市――
総人口２３０万人。その内実に８割が学生が締める街。科学技術の最先端が集められた一つの大きな実験都市では、学生達が日々『頭の開発』に取り組んでいる。記憶術という名目で薬物、生体刺激、そういった実験の元に学生は超能力を身に着けていく。いわば、超能力が科学的に証明されていた世界。外界とは分厚い外壁で隔離され、科学力は外の世界と２０年～３０年の開きがあるとされている。

学生はレベル０（無能力者）からレベル５（超能力者）の６段階に分けられ、その内の６割が無能力者……つまりレベル０に分類される。その中で頂点に属するのレベル５は、たったの７人しか存在していない。

これほどまでに科学が進んだ都市であっても、犯罪を起こす輩は消える事が無い。大きな壁にぶつかり挫折したもの、無能力者というレッテルを貼られたと拗ねる者、そういった者たちが街で大小の事件を起こしている。

もちろん野放しと言うわけはなく、治安を守るために風紀委員（ジャッジメント）と警備員（アンチスキル）が活動をしている。

風紀委員は、各学校より志願し選抜された学生達による治安維持機関。ここの学校や支部によって管轄が分けられており、原則はその校内の治安維持に務める。しかし現状では犯罪の抑止的な意味で、担当エリアの警邏も行っている。活動時には風紀委員である証明として、盾のマークの腕章装着が義務である。

一方警備員は、志願した教員等大人立ちで構成された治安維持機関。外の世界で言えば警察に当たる組織である。学校外で起こる事件に対応する。大人達は学生と違い能力開発を受けていないため無能力者であるが、能力者に対抗できるように最新鋭の武装が配備される。学生達で構成される風紀委員より危険な事件を担当し、職権も風紀委員より上である。三又の矛をモチーフにしたマークである。

そして今日も――

「落ち着けって」

ビル建設予定地と書かれた看板を越えた敷地内。相対する一人の少女と一組の男女。三人が息を切らせて対峙している。一組の男女の男子、短髪で茶髪、耳にピアスをつけブレザーの学生服を着た少年が話しかける。話かけられた少女は、明るめの茶色の髪で毛先にパーマが当てられていて、くるくると巻き癖がついている。ノースリーブのTシャツとスカートがドッキングしたワンピースに七部袖の黒のボレロにボーダー柄のレギンスを着ていて、足にはスタッズ付きのグラディエーターサンダルを履いている。

「そ、そうだよ。私たち、あなたに何もしないし……」

そう言うのは一組の男女の女子。胸まで届きそうな黒髪に白梅の髪留めをつけ、学校指定のセーラー服を着ている。他の二人と同じように息を切らし、汗が頬をつたう。

「こないで……、こないでー」

目を見開き会話にならない彼女の拒絶が二人の耳に届く。二人から逃げている少女は、体をがくがくと震わせ肌が見える腕に爪を立てる。赤い線を引き彼女はぶつぶつと何か呟いている。

「やばいぞ佐天……、やっぱりスキルアウトに襲われてたのが、相当ショックを引き起こしてるな」

一組の男女の男子が隣になっている少女、佐天　涙子に声のトーンを下げて話しかける。それを聞いた佐天は一度頷き、

「御田頼の言うように、確かにショックを起こしてるね。白井さんには連絡したし、なんとか足止めを……」

佐天と隣に立つ御田頼　崇は、お互い視線を合わせ頷いた。二人の意識は『時間稼ぎ』だ。

佐天の言う白井さんとは、風紀委員第一七七支部で活動する風紀委員であり、数少ない空間移動能力者の白井　黒子である。佐天と白井は友人の関係であり、御田頼は数回会った事がある。そしてこの場所は、２３学区に分けられた学園都市の中で、第一七七支部がある第７学区と呼ばれる区画にある。もちろん能力者の学生が事件を起こしたり、暴走したりする場合も警備員へ連絡が必須であるが、空間移動できる白井の方が現場へ来るほうが圧倒的に早い事と、警備員への連絡は追いかけている二人より、第一七七支部にいる佐天の親友の初春　飾利に任せた方が良いと判断したため、佐天は白井へ連絡を入れた。

「コワイ、コワイヨ……ヒトガコワイ」

俯いた少女はぶつぶつと相変わらず呟きながら、周囲が揺らめくほ

どの熱気を帯びる。手からではなく空間に炎を作り出す。作り出した炎を両手で包むとさらに炎の力が増し、轟々と燃え上がる。「ふふふ」と不気味な笑みを浮かべ正面に立つ二人へ虚ろな目を向ける。

「消えてぇぇ」

両手を振りかぶり正面の二人に投げつける。少女のレベルがどのくらいなのか不明だが、激しく燃え上がる大きな炎の塊が二人目掛けて飛んでいく。

「ね、ねぇ御田頼……結構大きいよ」
「のんびりしてねぇでやるよ」
「わかってるって」

炎に対し御田頼は右半身を前に半身で構える。その御田頼と背中を合わせるように、左半身を前に半身で佐天も構える。御田頼は右掌を前に突き出し、佐天は左掌を突き出し小指側面部を合わせる。そして二人が同時に能力を発動させる。

炎が二人と衝突する。爆炎と衝撃を生みだし爆発する。地面を吹き飛ばし砂塵を巻き上げた。炎を投げた少女は息を切らしつつ、徐々に正気に戻っていく。虚ろだった目に再び光をおび始める。彼女の息が整い始めると同時に視界が晴れてくる。砂塵の中から見えてきたのは、先ほどと同じ構えでこちらを見ている二人の姿。火傷も衝撃も何も無かったかのように、二人には先ほどの爆発の影響が何も見られない。服にも焦げた後も無く二人は平然とそこに立っている。

「落ち着いた？」

佐天が少女へ話しかける。その顔は睨むでも警戒するでもなく、優

しい微笑を浮かべている。御田頼はやれやれといった表情で手をおろす。

「あ……あの」

少女はまだ震えているが警戒がとけたようで、やっとこちらへ言葉と視線を向けた。

「大丈夫だよ。もうあいつらはいないから」

「は、はい。あのすみません、私…その……」

「悪いのはあいつらだし、あんたには責任はねぇよ。だから落ち着けよ」

そして力なく少女は力なく地面へ座り込んだ。

「あなた達は一体……」

本来こういうのは風紀委員（ジャッジメント）の役目なのだが、二人は風紀委員（ジャッジメント）の腕章はつけていない。

「ただの……おせっかい、だよ」

佐天は困ったような、むず痒いような表情で答えた。

「そうそう、困ったやつは放っておけないだけだよ」

「そう…ですか。でも怪我とか」

先ほど目視で確認したが二人には爆発の痕跡が見当たらない

「大丈夫だよ。見ての通りぴんぴんしてるから」

そう言って佐天はくるりと体をダンサーのように1回転させる。

「よかった。でも一体どうやって」

「それは……」

佐天と御田頼は一度お互いを見やり、再度彼女へ向き直る。

「二人で一つの、完全防御」

（ほぼ……なんだけどね）

とほぼと心の中で呟いた御田頼と佐天は彼女に向けて、にぃっと笑顔を向けた。その彼女の頭上にははてなが浮かんでいた。

二人で一つの……（後書き）

いかがでしたか？まぁ１話と言うよりエピソード０てきな意味合いが強いですけど。

感想やご意見お待ちしてます♪

いつもとほぼ変わらぬ日常（前書き）

ちょこっと出来上がったので投稿します。

いつもとほぼ変わらぬ日常

「はぁ……」

佐天は大きく息を吐いた。幻想御手（レベルアッパー）事件に巻き込まれた佐天。首謀者の木山春美が作成した音楽ソフトを視聴した人間の脳波を操り、１万人もの人間の脳と脳を繋いだ巨大な演算装置を作り上げた事件。脳波を操られた視聴者は昏睡状態なってしまうという副作用があった。使用した佐天も昏睡し病院に搬送された一人である。

「そんな都合よくいかないなぁ……」

レベル０《無能力者》でも自分の居場所を再認識した佐天ではあるが、やはり能力に対しての憧れは消えたわけではない。幻想御手事件以降も授業を受けたりしているが、自分に何か変化があったわけではない。幻想御手により数枚の葉っぱを浮かせた空力を扱う能力が現れた、一度能力を発現させた時の感覚はあるため同じように試して見るが葉っぱは掌の上に乗ったまま動きは無い。

「さて……と、今日は何にしようかな」

いろいろ思考を巡らせていた佐天は、夕飯の材料を買いにスーパーへ立ち寄った。野菜コーナーを回り、鮮魚、精肉と見て回る佐天の買い物カゴには、材料が入れられていく。

「あとは……、あれ？」

ふと何気なく横に投げた視線の先には、佐天の通う柵川中学とは違

う学校の制服を着ている男子学生が一人。まったく関わりが無いのが普通なのだが、佐天は一度だけ彼に合っている。

「……あ」

向こうもこちらへ視線を向けた際に佐天に気づいたように声をあげる。数秒固まった二人だったが、やがて「どうも」と一瞥する。

「えっと、補修の時にいましたよね？」

「は、はい」

幻想御手（レベルアッパー）を使用した学生が集められて、行われた補修の事である。不意に男子学生から話しかけられた佐天は、少しだけ驚き声を上ずらせた。

「やっぱり。ヤンキーのお姉さんに自分の意見を言ってましたよね。それが印象的で覚えてました」

「あは、あははぁー」

右手で頭の裏を撫でながら、佐天はぎこちない笑みを浮かべた。

「家はこっちの方なんですか？」

佐天が会話に困り何気なしに振った話題。男子は「はい」と答えた。その後話を聞くと佐天の家のほんのすぐ近くと言う事が判明した。違う中学でも住む場所は割りと自由に選べる。もちろん、その学校の管轄の物に限るのだが。そんな彼の買い物をカゴに視線を移す。調理済みのお弁当にパン、そして野菜ジュース。これを見るだけで料理しない人だと言う事がわかる。そんな彼は佐天と話をしながら、デザートにゼリーにしようかプリンにしようかで迷っている様子だ

った。そんな佐天の視線に気づいたのか、彼はバツが悪そうに笑みを浮かべた。

「それじゃあ、お先に」

そういって男子はプリンとゼリーを両方カゴに入れレジへと向かった。佐天はその１０分後、レジへの長い長蛇の列の最後尾に並んだ。男子と一緒にレジに行けばこんなことにはならなかったのかなと、佐天は少しだけ後悔をした。

それから４０分後に自宅に着いた佐天は、とりあえず買ってきた材料を取り出す。買ってきたものはペンネ一袋、簡単調理済みのミートソースとマッシュルームにんにくと取り出した。一人分の食事のため量はそんなにないが、ペンネだけは余る予感がしていたが、あと１回分と考えれば安い物だ。とりあえず鞄を机の横に置き学校指定のセーラー服を脱いだ。ベットの上にとりあえず放り投げ部屋義に着替える。半そでのＴシャツにショートパンツという格好にいつも愛用しているエプロンをつける。なれた手つきで買ってきたにんにくをみじん切りに、マッシュルームをスライスしていく。準備が出来た佐天は少し深めのなべに水をいれ塩を少量入れる。そしてＩＨのスイッチをいれ水を加熱する。ふっと言うまではしばらく時間がかかるため、その間に脱ぎっぱなしのセーラー服をハンガーにかける。もちろんにんにく臭いため、綺麗綺麗超綺麗というハンドソープで手をよーく洗ったのは言うまでも無い。鞄の中に入れておいた携帯を取り出し画面をチェックする。メールが１件。母親からあり佐天の体調を気遣う文面が表示される。とりあえず適当にメールを作成していると、キッチンからぽこぽこと音が聞こえだす。水が沸騰していると水が合図をしてくれている。急いでキッチンに戻

りペンネの袋を手に取り両面の袋を掴み引っ張る。なかなか堅く下手したら、中身全てがバラまかれる危険性があるが、佐天は顔を真っ赤にしながら引っ張る。それでも開かなかった為、爆発するよりましとの事で袋の端を斜めに裂く。そしてペンネを半分入れようと袋を傾けたときに、ペンネじゃないものがぽとんとなべの中へ。佐天の頭の部分から何かがぽとんと滑り落ちた。

「あ……」

いつも髪に止めていた白い梅の花の髪飾り。それが今鍋底へ沈んでいる。あまりの事に佐天は勢いよく手を鍋の中に入れ、沈んでいる髪飾りを掬い上げる。いそりで近くにあるタオルで水気を取る。早めに取ったのが幸をそうしたのか、とくに変形も変色はなかった。とりあえずその髪飾りを部屋のパソコンを置いてある勉強机の上に置き、再びキッチンへ戻った。

（よかった……）

ほっと、一安心した佐天は料理を再開する為、ペンネの袋を手に取る。そして鍋を見て佐天ははっとした。鍋の中では水がぽこぽこと表面を泡だたせ沸騰している。その中に入れた手を恐る恐るみるも、特になんの変化も無いいつもどおりの自分の手。

「あれ？」

何回見回してもなんの変哲も無い手。その手をもう一度鍋へと近づけると、鍋から立ちこめる水蒸気と熱気を感じ、

「熱っ」

と、勢いよく手を引っ込めた。それでもどうにも納得できない佐天は再度鍋に手を近づける。今度は、

（熱くない……熱くない）

そう心で念じながらゆっくりと近づける。するとさっきと同じように近づけても何も感じない。そのまま静かに、多少びびりながらお湯の中へと手を入れていく。そして掌が全部お湯の中に入った。ぶくぶくしているのは感じるが、なにも温度は感じない。そしてお湯から手を出して確認するも水分をまとったただの掌だ。

「あ……れ？」

そして念じるのを止めた佐天は右手が纏っている水分の熱さに声を上げるのだった。

後日判明したのは、佐天が無能力者ではなくなった事だった。佐天に発現した能力は、異能力者《ＬＥＶＥＬ２》「感官無効（インヴェレメント）」という能力だった。

いつもとほぼ変わらぬ日常（後書き）

いかがでしょうか。
説明不足な感じも否めませんね。

この時期はレベルアッパー後の話だと思ってください。
原作とはまた違った、とある科学の超電磁砲の世界です♪

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3555m/

とある科学の一組男女～インターフェア～

2010年10月9日14時11分発行